

目的： 道徳性の形成には子どもを取り巻く生活環境が大きく影響する。基本的な生活の場である家庭にはTVがあり、子どもはTVから日常的に多種多様な情報を得て育つ。TVから送信される映像を伴うメッセージは言葉のわからない幼児にはもともと訴求力が強く、具体的な行動モデルとして子どもに作用し、イメージを定着させる。幼児期からの継続的なTVメッセージの受容は一体、子どもの道徳性の形成にどのような影響を与えているのだろうか。本研究では道徳性を子どもの道徳的判断力から考察する。

方法： 昭和58年10月以来、三人の幼児を対象にTV視聴行動と生活行動について参与観察、母親に対するインタビュー調査、母親による行動記録、等々を継続的に実施している。この縦断的研究をもとに、対象児が幼稚園終了時点と小学校の一学期終了時点で実施した道徳検査の結果、及び、性格検査、知能検査の結果を本研究のデータとする。

結果： TV依存度のそれほど高くないB子（姉、神経質傾向）、C子（二人の兄）ともに判断傾向については女子の平均にほぼ近い結果がみられたが、判断力については一学期終了時点でB子が平均より低い。A君（一人っ子、TV依存度高い）は幼稚園終了時点では、他律的判断傾向、積極的判断傾向が強く、一学期終了時点で他律的判断傾向がさらに増加し、積極的判断傾向が減少。判断力についてはほぼ平均になるという結果であった。